

精神分析のはなし 第15回

ジャック＝アラン・ミレール)

分析に助けをもとめること、それはつねにひとつのカップルをべつのカップルで置き換えることです。あるいは、少なくとも、もとのカップルに、分析家と作るであろうカップルを、重ねることで。

配偶者がいる場合ですが、配偶者はそのようなことをあまりよくはとりません。配偶者は反対することもありますし、じっさい耐え忍ぶこともあります。

そして配偶者のほうが今度は分析を始める、ということもあります。しばしばカップルの問題が発見されるのは、分析をしているときだったりするのです。パートナーと何をしているのだろうか、この傷とどのように自分は番うことを考えられたのだろうかと自問します。また、ひとがあなたに云うことを解読しようと努めるために分析にやっていきます。

それを理解するにいたらなかった時、パートナーが放つシグナルや、あなたに宛てられたあたかも謎によって語られているかのような、あいまいで多義的、ひょっとすると悪意のあるメッセージを解読するように努めるために、分析に行くのです。

したがってひとは、パートナーの欲望の問いを、分析家というパートナーと扱うために、分析に行くのです。それから以下もよくあることです。あなたのパートナーが言ったことに傷ついたからという理由で、・・・一般化するのは難しいですが、まあでも一般的には、ある女性が彼氏に言われたことに耐えられないという理由で、分析にやってくる、ということ。もちろんあらゆるきまりには例外があります。

男性の側では、しばしば問題は、ふさわしいパートナーであろう女性を選ぶことができないという問題です。あるいは何人も（候補の女性が）いる場合、その女性がふさわしいのだと確信できない、という問題だったり、もしパートナーがいない場合は、なぜなのか、パートナーを作るのになにが障害となっているのか、という問いです。

したがって、すべてのケースにおいて、分析に助けを求めるということは、あなたにとってひとりのパートナーと賭けている部分において、補足的パートナーを導入すること、となります。ただ、あなたの本当のパートナーが誰なのかを知るのはそれほど明快なことではありません。分析において発見されるのは、あなたの本当のパートナーは、つねにあなたにとり耐え難いものである、ということです。

あなたの本当のパートナー、それはあなたの現実界です。それは抵抗し、あなたを占めるものです。ときおり、本当のパートナー、つまりこの現実界は、あなたの思考のことです。

あなたにやってくる思考を耐えるのが難しいことが起こりますし、あなたはそれらの思考に迫害されたりします。そのとき、あなたは肝心な部分をあなた自身の思考と賭けている、と言うことができます。どうしたらそれらを考えないようにできるのでしょうか？つまりほかのことを考えることができるのでしょうか？

こういう主体のことです。自分自身の思考にとらわれて苦しんでいたたり、「私は考える」を打ち消そうと努めたりする人たち。アルコールやドラッグによってそれらの思考を毒抜きしよう、感覚を麻痺させよう、思考を手なずけようとする人たち。それはときおり自殺の考えが浮かぶほどまでの事態に至ります。自分の思考と決別するための過激な方法でもありえます。

ときおり、本質的なパートナー、現実界とは、身体のことになります。こう言ってよろしければ、自分の頭でしかないような身体、性的行為において不感症にとどまる身体のことです。いっぽうで愛はそこに存在しているのに、あるいは、欲望や愛がなくて期待された勃起がおこらない、うまくいかない身体、とか。あるいは湿疹に覆われている身体でもありえます。

そしてそのような身体があらわれたり消えたりするのがなぜなのかを、ひとは知りません。ときおり本質的なパートナーが、ひとがあらゆる注意をはらう、苦しみのすべてを凝縮させているイメージであることもあります。その場合、あなたが結びついているひと、というのは、しばしば、あの現実界を身にまとわせているだけだったりします。この現実界こそがあなたの本当のパートナーなのです。

あなたの真の基礎が現れるのが分析においてわかるのはこんな風にしてのことです。そしてときおりそれは辛く、つねに驚きに満ちているものです。

例を挙げてみましょう。もちろん個別的な例です。ひとりの女性がいて、生まれた時に父に見捨てられた女性です。さらに生まれる前からもう見捨てられていたと言います。というのは父はセックスだけしてすぐに逃げてしまったというケースだからです。それで誰かが父の代わりを果たしたかと言えば、彼女はたいへん幼いときに、つまり幼少期に、誰も彼女のために支払わないと決めたというのです。じつのところ、彼女が、こう言ってよければ、不運にもかかわらず、彼女自身がそう決めたのです。つまり彼女は「私は誰も必要としていない」と言うことによって、見捨てられたことを自身で引き受けたのです。

ではどのように彼女はその状況から脱したのでしょうか。人生のなかで、彼女はある種放浪のときがありました。そうですね、彼女は私には亀を思わせませ。裏返しになって家を歩いたりしていました。そして彼女はひとりの男性を見つけます。彼と結びついて、彼女はカップルを作り、その男と子供をつくりました。では彼女が見つけたそのひとは、どんな男性だったのでしょうか？

それは、まさに、「女性のためには支払いしたくない」、男性だったのです。もちろん、その男性は彼女に似合っています。女性にたいして支払いをしたくない男性なのです。いろんな男性がいるなかで、彼女がカップルを作ったのはまさにその男性とであり、おまけにその人はホモセクシャルでした。そしてふたりは愛し合い、調和していました。カップルの基礎となっているのは、それです、「片方がもう片方のために支払わない」、ということだったのです。

すべては一点をのぞきうまく行っています。その一点とは不幸が彼女を分析に導いた、という点でした。そして分析のなかで、「彼女のために誰かが支払ってくれたらいいな」という欲望が生まれました。ここでひとつの夢を見ます。小さい頃あったお店が出てきた、と彼女は回想します。

彼女がその店でいくつか商品をとっていると、彼女の下部のほうにいた店のひとが、「パパが払ってくれるよ」と言うのです。彼女がパパと呼ぶひとは、父の代理で、このように彼女は、男性、子どもたちの父が彼女のために支払いをする、ということに欲望しはじめたのです。彼女はもう亀であることを望んでいません。

しかし最初に男性と結んだ結婚契約に彼女は忠実でしたが、その契約は症状にじつは基づいていました。その相手、男性のほうは、彼女を放そうとしませんでした。彼女は彼を嫌いになり、別れることを考えはじめ、別れを準備しはじめます。男の方は文句を言いませんでした。だから必然的に彼女は彼に請求書を提示しました。

そしてある日、彼女はガスと電気料金の高い請求書を彼に提示したのです。彼にとっては明らかに耐えられないもので、彼はしっちゃんかめっちゃんになり、怒って離婚を要求しました。それは彼がフランスのガス会社に請求書を送ってくるな、もう支払わないぞと告げた後のことでした。

そして当然のこと、彼女にとりそれは辛いことでした。精神分析がこのカップルの症状的基礎であるものに到達してしまったのだと、言うことができるでしょう。彼女はあの「私は誰も必要としていない」を乗り越えたのです。しかしその後、彼女は離婚となりました。彼女が別れたあの男性は、もう彼女のために支払いをしないという状況に、彼女は確実に置かれることになったのです。

以上です。たとえば、精神分析によって発見されるひとつの真理、それがここにはありませんね。こう言ってよろしければ、それは親愛的に、支払われたのでした。

べつの例を出してみましょう。ある若い女性がある男と結婚しましたが、その男性はそれ

まで仲間グループで生活していました。仲間グループというものは、男たちが押し合いへし合いしたり、飲み食いを一緒にしたり、男同士で盛り上がり・・というようなものです。そしてじつは、彼女が選んだ男性ですが、えいっ、と、彼女がそのグループから彼を連れ去ったのでした。それこそまさに彼女が望んでいたことだったのです。つまり彼女はひとりの男性の節制や制止を乗り越えたかったのです。ひとりの女性と結びつくという極端な悪意も乗り越えたかったのです。というのは、その男性は、彼自身の思考、悪い考えと固く結びついた男性だったからなのです。彼女はある種ほかの誰でもない、その男性を得るために、一種の力技を実行したのです。彼女は「自分は求婚者に欠かなかったけれど（それでも彼がよかったのだ）」、とっていました。

その結果といえば、このカップルの住む施設の支払いをその男性が彼女にさせないで一日も過ごしませんでした。不快な気づきという形のもとで、です。気づきというのは、侮辱にまで至りました。とりわけ生々しい形のもとの、日常的な侮辱を、その男性は彼女に与えていました。

そこでは、フロイトが「男性における、女性性への憎しみ」と呼ぶものが、もっとも明らかな仕方で呈示されています。周り、友達はやし立てて、彼女に「彼と別れなさいよ！」と言いました。これは有名な問い「彼女は彼になにを見ているのか？」です。これは、「パートナー、本当のパートナーとは、しばしばあなたの症状である」、ということ警告する問いですね。あまりに別れをすすめる周りのプレッシャーがひどかったので、彼女は分析に飛び込んできたというわけです。

では彼女は分析でなにを発見したのでしょうか？まず、最初彼女はとても具合がよかったのです。彼女は榮えていて、ベッドでは享樂していました。なぜなら侮辱のあとは、ひとは落ち着いたからです。彼女は身ごもり、仕事をして、じつのところ、あらゆる苦しみがある事柄に凝縮されました。それはじつは、彼女を幸せにするこの完璧な男性のことで、彼は同時に侮辱的であり、つまりそれが彼女にダメージを与えていました。

そして分析で、彼女はそのパートナーが言うこと（ことば）のせいで、荒んでいる状態でした。ではその先に、なにが明らかになったのでしょうか？

分析家の助けのおかげで、あるいは少なくとも「主体は幸せである」という—その幸せに「自分の苦しみについて」という文言も含まれますが—この展望が助けとなって、侮辱のパロールがまさに彼女の享樂の芯なのだとわかったのです。お望みなら、夫婦間の侮辱から、パロールの享樂を彼女は得ているのです。

彼女は存在するためにスティグマをはられる必要があると分かったのです。かつては神の印として認められたスティグマですが、彼女が手に入れたのがあの男であったとすれば、それは彼が彼女に侮辱的に話すかぎりにおいて、であり、そのようにしてこそ、彼女は自

分を女性と感じるのです。

では、それはなぜなのでしょう？ここで私たちは究極に至ることになります。彼女の父親が女性性にたいして根深い軽蔑をもっていたからなのです。その軽蔑は、宗教から来ていました。つまり神とのその関係においてこそ、父親は不信を発達させ、女性性にたいして真の憎しみが存在し、それは父親の娘、彼女にとっても逃れられないものだったのです。

そして地獄のカップルは父親の症状を記念するように反復していたのです。彼女が望んだパートナーの仲介によって、その主体、この若い女性は、父親によるスティグマ化を享樂していたわけです。そして彼女がもし別れるなら、もし父親の永続化したイメージが消え去るならば、彼女は彼と別れられるでしょう。でもたぶん、もし彼女が侮辱を欲することをやめるならば、たぶん、そのパートナーもこのモードで彼女に話しかけることをやめるでしょう。